

ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



「女性の品格 装いから生き方まで」

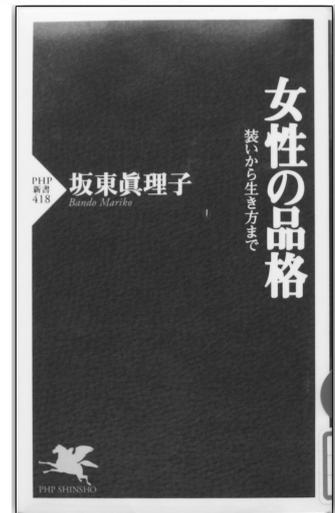
坂東真理子 著 PHP 新書 2006年 (K:エッセイ・文学)

作者は、総理府入省後、埼玉県副知事や女性初の総領事などを経たあと、昭和女子大学学長、という経歴の持ち主である。

本書は、「マナーと品格」「品格のある言葉と話し方」「品格ある装い」「品格のある暮らし」など、女性としての振舞い方を具体的にアドバイスしたハウツー的なものと、「品格ある人間関係」「品格のある行動」「品格のある生き方」など、生き方や行動規範に関わるものの両方が盛り込まれている。

作者の経験から得た豊富な具体的アドバイスがおもしろくて一気に読み進めることができる。「ティッシュペーパーやノベルティなど無料のものをもらわない」など、読んでいてドキッとする人も多いのではないだろうか。

題名は「女性の品格」であるが、結局、人間の品格とは何か、品格ある生き方とは何かについて書かれているので、男性にも読んでみてほしい本である。そして、出かける前に鏡を見てチェックするように、一度ではなく、忘れた頃にまた読んでみて、自分の生き方、品格をチェックしてみたいものである。(花賀)



「父子家庭が男を救う」

重川治樹 著 論創社 2012年 (F:子育て)

「父子家庭が男を救う」とは一体どういう意味なのだろうか。

今から30年程前、毎日新聞の記者であった著者は、41歳の時離婚し、2児を引き取って父子家庭となった。そんな著者を待っていたのは同僚からの次のような言葉であった。

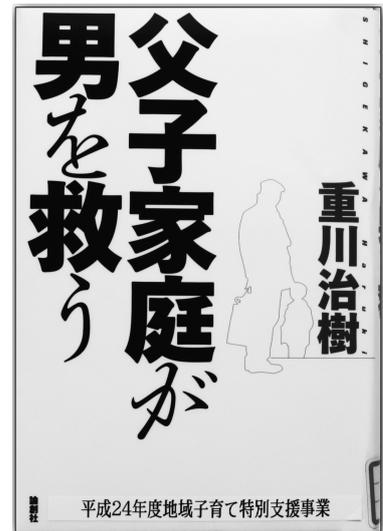
「男が家事育児などやっていたら仕事に全力投球できるはずがない」「早く結婚して、まともな企業戦士として復帰せよ」など。著者は言う。「父子家庭には、生きるためのあらゆるノウハウが欠けているうえに精神的な落ち込みがひどく、社会の理解がほとんどない。とりわけ仲間であるべき男たちからは助けどころか、苦笑、嘲笑が返ってくるだけだ」

離婚という事態に直面しても子どもがいなければ回復しやすいが、子どもを抱えているとそうはいかない。得意でもない料理、子どもの世話全部、仕事は残業などする余裕もない…。そんなことを同僚の男たちは想像すらできないというわけだ。

離婚という事態に直面しても子どもがいなければ回復しやすいが、子どもを抱えているとそうはいかない。得意でもない料理、子どもの世話全部、仕事は残業などする余裕もない…。そんなことを同僚の男たちは想像すらできないというわけだ。

また著者はかねがね、男だけがどうしてDV、性暴力などの愚行を繰り返しているのかという疑問を抱き続けてきた。そんな中、父子家庭体験から「男たちの愚行の根底に、男たち自身がほとんど気づいていない『男性問題』の深く大きな根が横たわっている」と考えるようになる。そして、男たちは「男病」という重篤な病気にかかっているというひとつの結論に至る。「男病」の詳しい定義については本書を読んでいただきたい。

本書は、父子家庭という切り口から男性問題を見た「男性学」の書であり、それが「父子家庭が男を救う」の意味するところである。男社会の象徴である大企業で、仕事を辞めずに父子家庭を生きぬいた著者が語るからこそ説得力がある一冊となっている。(O.S)



かいふく

「恢復する家族」

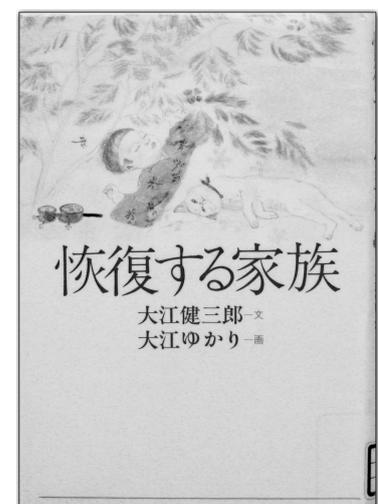
大江健三郎 文 大江ゆかり 画 講談社 1995年

(K:エッセイ・文学)

大江健三郎の小説、評論などはむずかしいが、この本は、わかりやすく、読みやすく、そしてとても深い。

知的障害を持って生まれた長男光君を中心にした、大江家の家族の暮らしをありのままに綴ったエッセイで、20話から成っている。

もともとは、ある製薬会社が刊行している季刊誌に連載されたもので、光君が30歳になったころ（1990年）からの5年間、患者の家族の立場で



執筆された。

その5年間には、光君のCD出版とかコンサート、音楽を聴きにザルツブルグなどへ初の海外旅行等大きな出来事があった。それらはむろん突如わき起こったことではなく、日々のていねいな暮らしの延長に、必然性をもって実現したことだ。

大江一家、祖母、弟妹、両親たちは光君を核にして、類いまれなる知性、愛情、想像力で深く係わりあって暮らしている。光君は日常の言葉遣いが独特で、分かりにくいところがあるのだが、彼の言わんとする真意を父親大江は、いつもきっちり読み解く。それは、光君の常の心のありようを、より深く理解している一つの証しであるように思える。

そんな筆者が、まだ光君が幼かったころに、かたくなに言うことをきこうとしない光君に業を煮やし、なんと渋谷のデパートで置いてきぼりにしてしまったことがあったという。その劇的な顛末には、悩める若き父親の生の姿があり、心を寄せずにはいられない。

ところどころに、妻大江ゆかりが描いた草花や家族の彩色画が挟まれていて、その素朴で優しく美しい画面には、万言のことが隠れているようでページを繰るのを忘れるほどであった。（大空）

「ショージとタカオ」

井手洋子 著 文藝春秋 2012年 (0:その他)

数々の賞に輝いたドキュメンタリー映画「ショージとタカオ」、布川事件（1967年茨城県利根川町布川で起きた強盗殺人事件）を知らなかった私は、書名とオジサンふたりのインパクトのある表紙の写真にひかれ軽い気持ちで手にとった。

しかし、そこには「めげない、あきらめない、立ち止まらない！」を合言葉に布川事件の冤罪被害者、ショージ君こと桜井昌司さん、タカオちゃんこと杉山卓男さんの再審無罪を勝ち取るまでの、獄中29年、仮釈放15年の44年の軌跡が描かれていた。

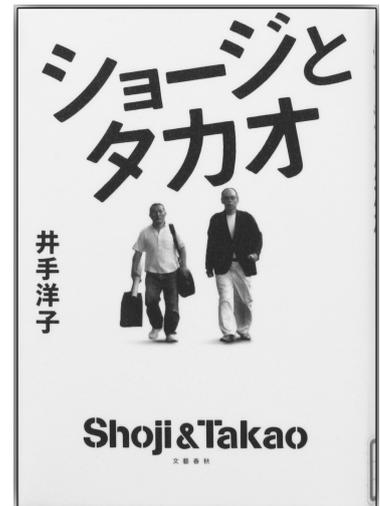
1994年、ふたりが獄中にいる時、フリーランスの映像ディレクターであった著者は知人から支援コンサート「壁のうた」の記録を知人から頼まれ、ふたりのことを初めて知る。10年も支援を続けている熱い思いを知りたくて、2年後の1996年、ショージ君49歳、タカオちゃん50歳の時に仮釈放された、ふたりに初めて会う。

29年間の長い月日を獄中で過ごした浦島太郎状態のふたりが、再審で無罪を勝ち取るまでの15年間、著者自身も挫折を経験しながら「等身大」である、ふたりの人生に寄り添う。

冤罪によって人生を奪われたことによる途轍もない葛藤や試練、憤りや悲しみ苦しみと戦いながらも前進し、支援、応援してくれる人々に出会い、働き、結婚し、父親になる。

2011年に再審裁判で無罪の判決を受け「自由を得られる日」、念願の“フツーのおじさんになる日”を迎える。

著者の優しい文章がダイレクトに心に残ります。ぜひ、読んでみてください。（K）



「すごい 弁当力！」 佐藤剛史 著 五月書房 2009年 (0:その他)

弁当。今やコンビニ、スーパー、弁当屋とあり、わざわざ作らなくても手に入る。そして、共働きなどで忙しく、作っている暇がないというのが現状だろう。皆さんには「お弁当の思い出」というものはありますか？ 私の場合、母が忙しいのに、早起きして、毎日一生懸命つくってくれた思い出がある。

著者はお弁当の専門家ではない。農学部で環境経済学が専門の大学教員だが、体験を重視した、「環境」「食」「生」、最近では「(結)婚学」にまで取り組んだ授業をしている。男女、子どもを問わず自分でお弁当を作ることには、いろいろ乗り越えなくてはいけない過程がある。しかし、そうすれば料理ができるようになるだけではなく、他人を思いやる力とか企画力、突き詰めれば自給率の問題にまでいきあたり、いろいろな力(弁当力)が付き、人や社会を変える力があるという。

この本では、こういった「お弁当の思い出」や「弁当の日」の実践の例がのせられ、お弁当のもつ力というものについて解説してくれている。著者は「『弁当づくり』を応援する本だけど、弁当づくりがうまくなる本じゃない。だけど、弁当が作りたくなることは間違いない」と述べている。皆さんもこの本を読んでチャレンジしてみませんか？ (か)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシャリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第3号 (2013年8月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】 書評誌と言っても、文芸的な批評を目的としたものではなく、本の魅力を伝え、紹介していくことを主眼に作成し、今回でやっと3号目の発行を迎えました。少ないメンバーで何とかがんばってますので、今後ともよろしくお願ひします。

☆ボランティアスタッフ募集!!!

あなたも書評を書いてみませんか? 興味のある方は libreplus@yahoo.co.jp までe-mailでご連絡ください。